
ろまんす！！

さと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ろまんす！！

【コード】

N9568T

【作者名】

やと

【あらすじ】

18歳になった湖の騎士ランロットは、従兄弟のポールス、ライオネルとともに、アーサー王の円卓の騎士の一員となるべくキャメロットへと旅立つ。

しかし、男のままでは災禍しか呼び込まないからと、養母である湖の妖精ヴィヴィアンに女の子にされてしまうのであった…。

元ネタ「アーサー王物語」を知っているとBLに思える箇所が出てきますので、苦手な方はご注意ください。

プロットに毛が生えた程度の文章ですので、かなり読みにくい
かと思われます。申し訳ございません。

1・湖のランスロット、女になる

「養母上、用事とはなんですか」

ランスロットは少しだけ唇を突き出し、不満そうに育ての親である湖のヴィヴィアン姫を見つめた。

明日はランスロットの18歳の誕生日である。今日はその前祝いと従弟のライオネルが鷹狩に連れ出してくれたのであった。

その最中、養母から呼び出しを食らいすっかり膨れてしまったランスロットである。

ヴィヴィアンは頬を膨らませたランスロットを見遣り、呆れたようにため息を吐いた。

「ランスロット、いいですか。以前から何度も言っているように、おまえは18になったらこの城を出てキャメロットへ行かねばなりません」

「養母上、俺は以前から何度も申し上げているように、キャメロットへなぞ行きません」

きつぱりと言い切ったランスロットの言葉をヴィヴィアンは綺麗に無視した。

「しかし、おまえがおまえのまままで赴けば、やがてキャメロットは崩壊の道を辿るのです」

「だからキャメロットへなんか行かないと何度申せば……!!」

ランスロットの抗議は、しかし最後まで言い終わることが出来なかった。湖のヴィヴィアンが彼目掛け、なにやら薄ピンク色をした液体を振り掛けたからである。

大口を開けていたランスロットは僅かながらその液体を飲み込んだ。いつまでも残るような、ねっとりとした甘さが口の中に広がる。

「……いきなり何をするんですか、養母上」

腹の底から絞り出した声は主の意図に反して高かった。

そういえば、今まで僅かに見下ろしていたヴィヴィアンを見上げ

るような角度に首を持ち上げている。突然どっしりと、胸から肩に掛けるの重みが増した。

「養母上、何をした？」

ハスキーではあるものの変声期を過ぎた男にしては高すぎる声でキャンキャン喚くランスロットに、ヴィヴィアンはにっこりと微笑んで見せた。

「母からの饒別です。あなたも男のまま傾国の美男の誹りを受けるとより女の形で救国の英雄の名誉を授かった方が良いでしょう」

「俺は傾国も救国もしないと言っているでしょう！何故このままここで、貴女を護る騎士でいると言ってくださらないのですか！」

言ったきり俯いてしまったランスロットの泣いているように震える細い肩を、ヴィヴィアンは慈愛の瞳で見下ろす。

彼女だとして我が子同然に愛し、育てたこどもを手放したくなどなかつた。

だが……

「どこの世界に、世界を掴む力を持つ子供を、そうと知っていて狭い湖の底に縛り付けておく母親がいますか」

「養母上……」

ヴィヴィアンの思いに言葉を詰まらせたランスロットは背後から掛けられた声に振り返る。

そこには従弟のポールスとライオネルが立っていた。

「やあ、兄上。母上のお小言はお済みですか……な？」

兄のポールスが目と口を思いつき見開きその場に立ち尽くした。弟のライオネルもポールス同様にぼかんと口を開けてランスロットを見ている。

神秘的な顔つきをしたポールスがそろりと口を開く。

「母上、万が一と言うこともありますゆえ念のためお尋ね申し上げるが、その美姫はどなたですか」

「何を言っているんです、ポールス。おまえは共に育った従兄の顔を忘れたとも言うのですか。私はランスロットの面影まで

変えたつもりはありませんよ」

ボールスの、ランスロットとは似ていない厳つい顔がサツと青くなつた。

「や、やはりランスロット兄上ですか」

後方で顔を赤くしていたライオネルの顔も今度は兄と同じように青ざめていく。

「兄上、こんな格好にされるなど今度は一体何をやらかしたんです？俺はなんだか泣きたくなってきました」

立ち直りの早いボールスが、すっかり美女の中の美女と化した従兄に恨みがましい目を向けた。

確かにランスロットはこれまでも何度か養母によって姿を変えられたことがある。10歳の頃には丘向こうで民に悪さをするゴレムを一人で退治にいつて、もう二度とそんな無謀な真似はしないようにと一週間もウサギに変えられた。もう生半可なことでは驚かないと思っていたボールスも、まさか女にされるとは、と若干呆れ気味だった。

「ボールス、今本当に泣きたいのはおまえだけだともはや本気で思っているわけではあるまいな？」

「蛙の時は蛙に似合わぬ高潔さであったが、今はなかなか似合っておりません。兄上はまだなにか泣かなければならぬことでもおありですか？」

段々とふざけた気配を漂わす兄と悔しさにギリギリと唇を噛み締める従兄の間で、ライオネルは成す術なくオロオロするばかりだ。

「二人とも、じゃれるのもそこまでです。明日早くにキヤメロットへ発たねば聖霊降臨節に間に合いません」

「キヤメロット？」

今までろくにランスロットと目を合わせようとしなかったライオネルがヴィヴィアンの言葉に虚を突かれたように従兄を見る。

「兄上は、キヤメロットに行かれるのですか？あんなに嫌がっていたのに？」

ランスロットは、ヴィヴィアンを見た。それからボールスとライオネルを。

足下に目を落とし、ハアと大きく息を吐く。

今でもまだ、この城で美しい養母を護って暮らしたいという思いは強いけれど……

「ボールス、ライオネル。養母上を頼む」

ボールスとライオネルは信じられないものでも見るかのようにランスロットを見た。

「これはずるい。兄上は一人だけ円卓の騎士の誉れを得ようというのですか」

ボールスの言葉に続きライオネルも微笑む。

「私どももお供させて下さい。もちろん、母君がお許しくださればですが」

2・ランスロット、アーサー王に会う

ブルターニユの妖精ヴィヴィアンは、ちょっとした有名人物であった。

森の深くに魔法で蜃気楼の湖を創り、その中の絢爛豪華な城で何百という召使や騎士を抱えて暮らしている。その規模たるや、一国の王にも匹敵するという話である。

だが、その姿を実際に目にした者は少ない。

蜃気楼の湖が、どんな堅牢な城壁も敵わないほどに絶えず隙なく城を護っているからだ。

謎に包まれた神秘の美女は湖の姫とか湖の貴婦人などと呼ばれ、彼女の噂は海を隔てた遠いブリテンにまで届いた。

だから、キャメロットの王宮に人目を引く美女が一人の美しい娘と逞しい若者二人を引き連れて現れ「湖のヴィヴィアン」と名乗った時、アーサー王は最上級の礼を持ってこの一行をもてなした。

アーサー王がこの客人を歓待したのにはもうひとつ理由がある。父親の代からの相談役であり、アーサーの後見人でもある魔術師マーリンがこの世で唯一愛する女性、それこそが「湖のヴィヴィアン」であったからだ。

養母の後についてランスロットたちは王宮の大ホールに通された。そこには何十人も騎士と、諸侯と貴族、美しい貴婦人が勢ぞろいしていた。精霊降臨節は、アーサーに従う者たちが首都キャメロットに集う日でもある。

ランスロットはきよろきよろしないように注意しながら周囲を観察した。

王宮自体は湖の城に勝るとも劣らない大きさと美しさで、そこに集う人々もまた洗練されている。

しかし、何よりも美しいのはその人たちの中央に座する王と王妃である、と思った。

「ヴィヴィアン殿、わざわざ遠いブルターニュからお越しくださるとは」

アーサー王は王座から立ち上がり、かなりの勢いで一行の旅の疲れを労った。

「アーサー様、実はこの度お願いがございまして湖の城から出て参りました」

「ヴィヴィアン殿の願いとあれば私の全てを賭けても叶えて差し上げましょう」

大袈裟な王の言葉にヴィヴィアンが小さく笑う。

「そこまで難しいお願い事をするつもりはございませんわ」

そう言って、自分の後ろに控える子どもたちを、王の前に押し出す。

「私の養い子たちを陛下の騎士にさせていただきたいのです。きっとお役に立ちますでしょう」

内心、無理難題を持ち掛けられたらどうしよう、と思っていたアーサーはあまりに簡単なヴィヴィアンの「お願い」に声を立てて笑った。

「願ってもない申し出だ！湖の姫の推薦なら確かでしょう。しかしそれより何より、例え貴女の頼みが別のことだったとしても、その時はきつと私が貴女にその若者たちを私の騎士にとお願いしたことでしょう」

「陛下」

思わぬ幸運に顔を綻ばせるアーサーの斜め後方から何者かが低く声を掛けた。

輝く金色の髪。首から下は白く輝く鎧に護られている。確かに格好は騎士のそれであったが、その男は醸し出す雰囲気はやけに野生的である。

身長は高く、身体つきも武勇に優れた者共通の強靭さを持ちがっしりとしていた。それなのに、彼が声を発するまでその存在に気付かなかったことにランスロットは興味を引かれた。

外見も雰囲気も目立つ男でありながら、彼は完全にアーサーの影になっていたのだ。それはそのまま男のアーサー王への忠誠の証に見えたのだ。

男は身体をアーサーに向かって少し傾けると静かに忠告を述べる。「湖の姫のご推薦ですので間違いはないでしょうが、ここは形だけでも通過儀礼を受けてもらわなくては」

「おお、ガウエイン。そなたの言うとおりだ」

王は大きく頷いて、それから展開が飲み込めずに顔を付き合わせるポールスとライオネルに「騎士になるには条件があるのだ」と説明した。

「そう怯えた顔をするなよ」

ガウエインと呼ばれた騎士が笑う。

「円卓の騎士は常に最強の騎士団でなければならない。だから、騎士になるには円卓の騎士の誰か一人に勝たなければならないんだ」

しかし、おまえたちは湖の姫の推薦状付きだから形式だけにしておく、という言葉にポールスとライオネルは内心安堵の息を吐いた。腕に自信はあるものの、そう突然「最強の騎士団」と謳われるアーサー王の騎士を相手に勝負をしろと言われてもまともに試合が出来るとは思えなかったからだ。

「アグラヴェイン、モルドレッド。おまえたちが相手をしてやれ。わかっていると思うが、あまり本気になるなよ。姫のご子息方に怪我でもされたら困る」

金髪と黒髪の騎士が面倒臭そうに頷く。

そのやり取りにカチンときたのはポールスでもライオネルでもなくランスロットだった。

「ふたりとも、思い切り叩きのめして来い」

小声で隣に並ぶ従弟たちに指示を出す。

「しかし、兄上……」

「気後れすることも相手を気遣うこともない。おまえたちの強さは俺が保証するし、向こうははなからおまえたちを嘗めてかかってい

るからだ」

ランスロットの微笑みにポールスとライオネルからあつという間に緊張が消えた。それどころか、自分たちを馬鹿にしてかかっているあの騎士に一泡吹かせてやろう、と闘志にを燃やす。

「兄上、叩きのめして私がああ騎士殿に恨まれることになったら、私は兄上のせいですと言いますからね」

先陣を切ったのはライオネル。

ガウエインの用意させた槍を構え、10分ほどの対峙の後見事に歳も体格もそう変わらないモルドレット卿の盾を貫き勝利を収めた。続いたポールスも何の苦もなくアグラヴェイン卿の槍を弾き落として勝負を決める。

アーサー王は二人の戦いぶりに喜びの声を上げて玉座から立ち上がった。

「今日はなんと喜ばしい日だ！こんなにも素晴らしい若者が二人も私の騎士になってくれるとは！」

「ふたり？」

王の言葉に焦ったのはランスロットだ。

「お、恐れながら王様。私も騎士にさせていただくべくここに参ったのです」

広大なホール中が静まった。一瞬後、その場にいるヴィヴィアン、ポールス、ライオネルとランスロットそれに王と王妃を除いた全員が笑い出した。

「美しき乙女よ」

先ほどの戦いでポールスに勝ちを譲ったアグラヴェインが込み上げる笑いに声を震わせながら言う。

「ご勘弁いただきたいが、我々としても先ほど以上の手加減は出来ませぬゆえ」

「お嬢さん」

その隣で、目に滲んだ涙を拭いながらガウエインが言った。

「騎士というのは王の話し相手でもお酌役でもないんだ。兄上方と

離れたくない気持ちも分かるが」

負けず嫌いで馬鹿にされるのが嫌いなランスロットが、そういった言葉を聞き流せるはずもなく

「私は、貴方がお相手でも構いませんがね。それに、この者たちは私の弟のようなものです」

ニヤニヤと笑みを浮かべるガウエインを睨みつける。

「弟？そりゃ失礼した。しかし、俺が貴女のお相手をして差し上げることは残念ながらできないのですよ」

ガウエインは今度こそ声高に笑い出した。

「俺たち騎士には決まりごとが幾つか定められていてね。麗しの乙女を傷付けるなど言語道断だ。これは俺の最も敬愛するこのアーサー叔父上がお定めになった気高き騎士の掟さ」

「あなたに傷付けられるほど私はヤワではありません」

「その剣を持ったこともないような細腕に俺くらいの筋肉を付けてから言うんだな」

「お待ちなさい」

睨みあうガウエインとランスロットの間に何者かの声が割り込んだ。

鈴の音のような美しい声の主を、ランスロットは最初、養母のヴィヴィアンかと思った。

しかし、声はヴィヴィアンのいる場所とは違う方向から聞こえたのだ。

もつと前方。誰よりも前。そして、王の隣の席。

「ガウエイン殿、それはあまりにもそのお嬢さんに失礼です。同じ女として見過ごせませんわ」

すつくと立ち上がったのは、王の隣に座ってずっとニコニコと成り行きを見守っていた女性。

豊かな金髪のウェーブに、ランスロットは目を奪われた。白磁の肌に、薔薇色の唇。不機嫌そうな表情も彼女の高貴な存在感を際立たせるだけのものだった。

「しかし、グウィネヴィア様……」

「良いではありませんか、手合わせくらいしてあげても。それでやはり太刀打ちできなければ彼女も諦めるでしょう」

「そうでしょうか？」と微笑みかけられて、ランスロットはブンブンと頭を縦に振った。

実際にその姿を目の当たりにしてこの王と王妃に仕えたいと強く願ったが、今ここで他の者に負けてしまいうくらいなら最初から自分にその資格はないということだ。

「安心をし。もしおまえが負けてしまっても、私の侍女として王宮に置いてあげましょう。それならば、弟君らと離れなくて済むでしょう?」

「王妃様……」

ランスロットは王妃の心遣いに胸が一杯になった。

この美貌、この気高さ、そしてこの慈悲深さ。もし自分が男の姿のままこの場にいたら、間違いなく不埒な思いを抱いていただろう。「よろしいでしょう?あなた」

グウィネヴィアの問い掛けにアーサーも微笑んで答える。

「元々私は彼女を蔑ろにする気などなかったさ。我が甥ガウエインよ、騎士たる者美しい娘さんを悲しませるような真似をしてもならぬ。真摯な訴えを笑うなど以ての外だ」

「申し訳ありません」

アーサー王の言葉にガウエインは今までの表情を改め、ランスロットの前に片膝をついた。

「ご無礼をお許しください、姫。しかし、この私に貴女の相手をするとはご命令くださいませぬようにお願いいたします。私は本当に貴女の美貌にほんの些細な傷を付けることもしたくないので」

ランスロットは、何を思うよりも先に呆れ返ってガウエインの垂れた頭を見つめた。

よくもここまで素早く変われるものだ。さっきのさっきまで馬鹿にしきってランスロットを見下していた男の旋毛が、たった今日の

前にある。

「どうか顔をお上げください、ガウエイン卿」

ランスロットが微笑みを見せながら言う。

「私はあなたにかすり傷のひとつもつけられる気は毛頭ありませんが、お心遣いに感謝いたします」

ガウエインの肩がぴくりと反応したのが見えた。心では反論を唱えていながら王と王妃の手前表に出せない、という騎士の心情が手に取るように分かった。

この男もよっぽど負けず嫌いなようだ。旋毛と肩だけでここまで語る人物も珍しい。

「しかしガウエイン、おまえは騎士の中で最も武勇に長けた者だ。

他の者ではおまえのように巧みな手加減など出来ぬであろう」

「どうか、叔父上。後生ですから私にその役目をお命じくさいますな」

「ならば、この乙女の相手はどうするか……」

当然ながら、ランスロットの相手に志願をする騎士はひとりもいなかった。

手加減、というものは案外難しいもので、武器を構えたからにはこの娘を傷つけずに勝負を決する自信が誰の胸にもなかったからである。

「陛下、私に考えがあります」

再び沈黙の落ちかけたホールに、ヴィヴィアンの声が響き渡る。

「つまりは、円卓の騎士様方に匹敵する武勇を皆様に示せば、この娘を騎士にさせていただける、ということでしょう」

「しかし、試合以外にそのような方法があるのか」

「失礼ながら」

戸惑うアーサーにヴィヴィアンが続ける。

「御領地内に、どんな騎士様も破れずにいる呪われた砦があるとか」
「アーサーは頷いた。」

「私の騎士も何人も向かったが、帰ってきた者はいない」

その砦は、キャメロットの南東にある。

門の前を通りかかる者を、それが騎士であろうと商人や村人であろうと拘らず、砦の中から出てくる黒い鎧を身に纏った騎士が攻撃する。そうして勝負に敗れて力を失った人々を、そのまま砦内に引き摺り込むのだった。

そんな呪われた砦のせいで周囲の村は困り果てているのだという。

「陛下！」

呪いの砦の話聞いたランスロットは徐に立ち上がった。

「そのような砦があると聞いて黙っていることはできません。私、ただ今よりその砦に行つて呪いを解いて参ります」

そんなランスロットにヴィヴィアンは微笑む。

「お聞きの通りです、陛下。この娘、ランスロットが無事に砦の呪いを解いてキャメロットに戻りましたらその時は」

「その時は誰も文句はあるまい。騎士の称号を与えるが……。しかし……」

「慈悲深く気高きアーサー王様。どうぞ、ご心配は無用にごさいます」

アーサーから馬を借りヴィヴィアンが用意してくれていた剣アロンドライトを携えて、ランスロットはキャメロットを後にした。

3 ・ランスロットとガウエイン、賊に遭遇する(前書き)

興味を持っていただきありがとうございます。
更新スピードは限りなくスローです。

3・ランスロットとガウエイン、賊に遭遇する

キヤメロットと呪われていると噂される「悲しみの砦」はそう距離があるわけではない。アーサーは駿馬を貸してくれたらしく、この分だと明日の昼頃には到着しそうだつた。

それにしてもキヤメロットは美しい都だつた、とランスロットは思う。見かけだけが美しい都市は他にもあるが、キヤメロットは暮らす者すべてが幸福そうな顔をしていた。王の治世の良さと人徳のお陰であるう。

幾人もの騎士が帰つてこない砦の呪いを自分が解けるとは思えなかつたが、なんと少しでも騎士になりたい。

決意を新たにランスロットは借り物の白馬の腹を蹴つた。

と、その時ランスロットを呼び止める声が遙か後方から聞こえ、慌てて手綱を引く。

「ランスロット嬢！」

馬の鼻先を後ろに向けてみれば、遠くに栗色の馬に乗つた金髪の騎士が見える。ガウエインだつた。

「しかし見事だな。俺が鞍をかけている間にこんなところまで来るとは」

こんなに馬の扱いに長けた娘は見たことがない、とガウエインは城で見せたものとは違う快活な笑みをランスロットに向けた。

「キヤメロットを離れれば治安も悪くなる。悲しみの砦の近辺は尚更だ。俺が供をしよう」

そう言つてランスロットの隣に馬を並べる。ランスロットは一瞬ちらりと男を見遣り、それから前方に視線を戻した。

「供など必要ない」

にべもない答えにガウエインは苦笑を漏らす。

「城で苛めすぎたことは謝る。だから同行を許可してくれないか。実は、叔父上からの命令なんだ」

「アーサー様の……」

キヤメロットで見た王の姿を思い浮かべる。その場にいたすべての者が王の前に傳っていた。また、そうせずに居れない神々しさがアーサーにはあった。

そのアーサーの命令を受けたとあれば、ランスロットの言える言葉は一つしかない。

「では、同行だけは許可する」

愛想のない返事にもガウエインは微笑んで、小さく「礼を言う」と呟いた。

日も暮れかけた頃にふたりがたどり着いた村は、遠目から見ても何者かに酷く荒らされているのが分かった。

馬を進めても村人ひとり見かけない。人の気配はするものの、家屋の雨戸がぴしりと閉められわずかな明かりすら漏れていないのだった。

「これは、どうしたというのだ……!!」

これまでにアーサーの領地で見てきた町並み、特にキヤメロットとのギャップにランスロットは馬から下りて息を呑む。

闇に沈んだメインストリートの隅では、野犬が何かに群がっている。ガウエインが犬を追い払うと、その下から出てきたものは変わり果てた人間の姿であった。

「賊だな」

無残な遺体を調べてガウエインが言う。

背中から無慈悲に斬りつけられ、金目の物を奪われている。そうして遺体は放置され、賊を恐れた町人にも葬られることなく犬の餌へとなったのだ。

あまりの酷さにランスロット持ち前の騎士道精神に火が点いた。

「このような残虐な行いが罷り通って良いものか！ 賊め、このランスロットが成敗してくれる!!」

「待て！」

いきり立ち、再び馬に跨ろうとするランスロットをガウエインが止めた。

「なぜ止める！貴様、それでも誇り高きアーサー王の騎士か！」

「賊のねぐらも分らないというのにどうする気だ。事を急いたからといってこの男は生き返らないんだ。だったら朝になるのを待って住人から賊のねぐらを聞き出し、一網打尽にしてやるうじゃないか」

ガウエインの案は当を得ている。

ランスロットは頭に血が上りやすい性質ではあったが、また非常に素直な性格もしていた。

今回もあっさりと「分かった」と頷いて、今度は静かに馬に乗る。「おい、どこへ行く」

まだ賊を成敗に行こうとしているのかとガウエインは若干慌てたが、ランスロットはなんと言うこともないように告げた。

「朝まで待つのだろうか？町の真ん中で野宿というわけにもいかないだろう。今晚は町を出て眠り、日が昇ったらまたここに来て賊のことを聞いてはどうだ」

「いやいやいや、待て。あなたのような乙女が野宿などと……！」

一瞬頷きかけて、それから首をぶんぶんと左右に振りだしたガウエインに、ランスロットは内心「面倒臭い男だな」と毒づく。

「女の身だが野宿は慣れている」

「そういう問題ではない。賊にでも襲われたらどうするんだ！」

「その賊を明日退治するという話ではなかったか？明日一網打尽にするはずの敵を恐れてどうする」

「いや、しかし……」

ああ、本当に面倒臭い。

業を煮やしたランスロットは、まだなにかぶつぶつと呟いているガウエインの荷を己の馬に括り付けた。

「ガウエイン殿、早く来なければ荷を奪われてしまいますよ、私に

「！」

叫んで、馬に鞭をいれる。

白馬とランスロットは見る見るうちに小さくなっていく。

思わぬところからの盗賊の出現にガウエインはしばし放心していたが、正気に返ると舌打ちをひとつ残して慌ててランスロットのあとを追った。

言うだけのことはあり、ランスロットは確かに野宿に慣れていた。手早く薪を集めて火を熾し、兎を狩ってそれを焼く。

満腹になるとその場に寝転がり、早々と小さく寝息を立て始めた。その寝顔を見ながら、（湖の姫はどのようにしてこの娘を育てたのだろうか）とガウエインは呆れ果てる。

眠っていれば、可憐な乙女なのである。

肩までのブルネットの髪は優雅にカールし、卵のような白い肌が美しく映えている。

服装はシャツに革のパンツといった男の旅装束ではあるが、少しもランスロットの美しさを邪魔してはいない。

どうしてこの娘が野宿慣れし、あまつさえ騎士まで目指しているのか、ガウエインには不思議でならなかった。

アーサーから言い付かったのは「乙女の護衛」であるのだが、気分的には「やんちゃ盛りの子どものお守り」に近い。

疲労感のため息を吐き、持っていた小枝を焚き火にくべようとして、ガウエインは動きを止めた。

風が木々を揺らす音に紛れ、よろしくない気配を感じる。

ガウエインの背後の茂みと、ランスロットが眠るすぐ横にある茂みに人が隠れている。

月も傾きかけた深夜に息を殺して忍び寄ってくる輩など、碌なものであるはずがない。

「ラ
」

健やかに眠る姫君を起こそうと口を開きかけるが、ランスロットの目はとうに開いており、ゆっくりとアロondaイトを引き寄せている。

敵の正確な人数は分からないが、気配からしてひとりで相手に出来る数ではないだろう。

ガウエインはランスロットの剣の腕を疑っていたので甚だ不安ではあったが、女が剣を抜くのを仕方なしに見守った。

「名乗れ。闇討ちなどせずに、お互い堂々と戦おうではないか」

凜としたランスロットの声が辺りに響くが、返ってくるのは無言の返答のみである。

「ランスロット嬢、このような下賤の輩は正々堂々などという言葉を聞いたことすらないだろうよ」

ガウエインが警告すると、ランスロットは拗ねたように唇を突き出した。

「だからといって、こちらも卑しい戦いをするわけにはいかないだろう。姿を見せろ！私は湖のランスロットだ！」

名乗りとともに茂みから飛び出してきたのは、ランスロットの倍はあるかと思われる巨体の輩であった。

同時にガウエインの背後からもひとり、ふたりと姿を見せる。

チイツとガウエインは舌を打った。完全に、女を守りながらひとりで相手に出来る人数ではない。

かといって、ランスロットひとりだけを逃がそうとしてもすでに手遅れであった。合計5人の巨漢がふたりを取り囲むように輪になっている。

「なんてえ威勢のいい娘だ。売り飛ばしてもいい値になるだろうが、頭の好きそうなタイプじゃねえか」

「顔に似合わず上品ななりした娘っこが好きだからなあ、あの人あ」
下卑た目がランスロットを舐めるように眺める。しかし当の娘はそんな視線を気にすることなく、剣を構えたまま賊どもを睨み上げた。

「貴様らがあの村を襲った下衆どもか」

目の前の男がにやけながら「だったらどうする」と返すや否や、ランスロットの瞳は怒りに赤く燃えた。

ガウエインにすら追えないほどの速さで剣を振り、気付けば己の腕を待みに悪行を重ねてきた男がひとり、地面に倒れ伏している。

「頭のもとへ案内しろ」

地面に転がる男の首もとに剣の切っ先を突きつけたまま、男にも劣らぬ迫力で少女が命令する。

彼女の力量は確かに円卓の騎士に匹敵するだろう。

そこまで考えてガウエインは（いいや）と心中で訂正した。

（匹敵するところではない。俺を除いて、ここまでの剣の使い手は円卓の騎士の中に存在しないだろう）

この少女は何者なのだ、という思いがまたガウエインの中で大きくなる。

依然ガウエインとランスロットは2対4と劣勢であったが、思わぬ少女からの攻撃に賊はすっかり肝を冷やしてしまっていた。こうなると数など関係ない。

ガウエインひとりで4人を纏めて縄でひと括りにするのに、そう時間は掛からなかった。

「悪さはするものではないな」

馬の手綱を引くように縄に引かれた4人の悪党は肩を落としながらアジトへとガウエインを先導する。

その少し後ろでは、ランスロットが同じように最初に打ち倒した男を引いていた。

その目はいまだ、怒りに燃える騎士のそれだ。

唇を引き結ぶ彼女の表情は息を飲むほど美しく、ガウエインの胸にはさらに、この謎の多い少女への興味が募っていくのであった。

4・謎の騎士、エクトール・ドウ・マリス

さて、捕らえた賊に導かれてランスロットとガウエインが辿り着いた場所は森の奥にある洞窟であった。

「中にいるのは頭ひとりか」

ガウエインが尋ねると、賊のひとりは「いいや」と首を振る。

「親衛隊の奴らが2、3人残ってたはずだ」

「ふん。賊風情が親衛隊だと？笑わせるな」

機嫌の悪いランスロットは、前を歩く賊の尻を蹴飛ばしながら洞窟の入り口まで歩く。

しかし、そこに立つ月明かりに照らされた人影に一行は歩みを止めた。

その男は柔らかな栗色の髪をし、立派な甲冑を身に着けている。

ランスロットよりもいくらか年若であるうか。その佇まいは盗賊の仲間といった雰囲気ではない。その男　少年といっても差し支

えない　が身に纏う空気は、まさに高潔な騎士が纏うそれと同じものであった。

その若者の足元には、ランスロットたちが引き摺って来た賊の間間と思しき屈強な体格をした男たちが3人伸びている。

「貴様、何者だ」

ランスロットの誰何の声に、少年はゆっくりと顔を上げ、こちらを見た。

それから一行の顔をまじまじと見つめ、やがてガウエインに視線を合わせると肩膝を折る。

「そのご風貌、高名な騎士様とお見受けいたしました。わたくしの名はエクトール。エクトール・ドウ・マリスと申します」

盗賊のアジトに着いてみると、見知らぬ騎士に先を越されていた、などという予想外の展開に、先ほどまで怒色を露わにしていたランスロットもポカンと口を開けて事の成り行きを見守っている。

ガウエインはエクトールと名乗った若い騎士に礼を返して、己も名を告げた。

「俺はガウエイン。アーサー王の円卓の騎士だ。貴殿は、ここで何をしていたのだ？」

「ああ！あなたがあの有名なガウエイン様でしたか！」

エクトールはガウエインの名に恐縮すると「実は」と事情を語りだした。

聞けば、彼は海の向こうからこのブリテンに旅して来たのだという。その道すがら、夕方にランスロットとガウエインも見たあの町に立ち寄り、町の者から盗賊退治を依頼されたのだということであった。

「ガウエイン様もここへいらっしやるのでしたら、わたくしのいる必要はまるでありませんでしたね」

そう言つて微笑むエクトールの顔はやけに幼く見える。

ガウエインは「そんなことはない」と頭を振ると、町を荒らし回っていた賊をたったひとりで3人も始末したエクトールの腕を褒め称えた。

「貴殿のような腕の持ち主は円卓の騎士にもそうはいない。どうだ、キヤメロットへ行つて、その剣をアーサー様の為に揮つてはくれな
いか」

その申し出に、エクトールは申し訳なさそうに眉を寄せる。

「非常に光栄ではありますが、実はわたくしはある男を捜す旅の最中なのです。その男を見つけるまで、アーサー王にお仕えすることはできません」

「そうか、それは残念だ」

本当に残念そうな顔をするガウエインに、エクトールが「そうだと声を上げる。

「ガウエイン様はご存知ありませんか。その男、ランスロットと申すのですが……」

エクトールの言葉に、ガウエインは目を見開いた。目の前の男の

口から出た名が、ひどく聞き覚えのあるものであったからである。先ほどからふたりの会話に口を挟まず、ひとり縛り上げられた賊を見張っていた少女も驚いた顔でエクトールの顔を見ている。

「ランスロット……？」

「はい」

きつぱりと頷くエクトールの顔を見て、ガウエインは視線を少女に移す。

「貴殿が捜しているのは、まことに男か？」

「は？……ええ、間違いなく男ですが？」

わけの分からぬ問いにエクトールは一瞬訝しげな顔を見せた。

「エクトール殿」

ガウエインが何かを言うより早く、ランスロットが口を挟む。

「私も、ガウエイン殿も、そのような名の男など知りませぬが、故あなたは彼を捜しておられるのです？」

エクトールはわずかに困惑した表情をして、

「ちょっとした因縁があるのです」

簡潔にそれだけを答えただけであった。

ランスロットはしばらくの間、探るような目つきで目の前の若者を見つめていた。

村人に賊退治を頼まれたというエクトールに後の始末を任せ、ガウエインとランスロットは嘆きの砦へ向けて馬を進めた。

エクトールと別れてもランスロットは何かを深く考えるような表情で馬上に揺られている。

ランスロットの思案の種が、先ほどエクトールの口から出た男の存在であることは明瞭であったが、ガウエインはあえて尋ねようとはしなかった。

前に行く謎の多い少女と同名の男の存在はもちろん気にはなるのであるが、それ以上に今日中に到着する予定の砦の噂話が気に掛か

ったのである。

ふたりの目的地が「嘆きの砦」であると知ると、エクツールは驚きを露わにした。

そうして、旅の途中で己が聞いた「砦」に纏わる話を披露してくれたのであった。

『わたくしの聞いた話によりますと、砦の中にはびつしりと墓が並んでいるそうなのです。砦の前で暗黒の騎士に敗れた者たちは、その時点ではまだ息があるものの、内部に引きずり込まれると無惨に殺され、あらかじめ自分の名の彫られた墓に眠ることになるのだというのです』

永遠に。

何者かが砦にかけられた呪いを破るまで。

一面に墓が並ぶ砦の内部を想像して、ガウエインは不覚にも背筋を震わせた。

墓にはあらかじめそこに眠ることになる者の名が刻まれているのだという。

ならば、もうあとわずかで辿り着く自分とランスロットの名も、既に冷たい石に刻印されているのではあるまいか。

「なあ」

遠くの丘の頂に砦の影がぼんやりと浮かんできた頃になって、堪らずランスロットの背中に語りかける。

「あなたの強さは十分に分かった。だから、城に戻らないか？」

「私が円卓の騎士の末座に加えていただく条件は砦の呪いを破ることだろう。ガウエイン殿は私をアーサー様の騎士にしないおつもりか」

「そういうわけではない。城に戻ったら俺からも叔父上に口添えしよう、あなたの剣技は円卓の騎士に相応しいものだとな。だからこそ、こんなところで命を落とすべきではないだろう」

突然、ランスロットが馬首を返してガウエインへと向き直った。

「ここで我々が引き返したら、民はどうなる？」

向けられる瞳は憤りと嘲りに満ちている。彼女が先ほどまで盗賊に見せていたものと同じものであった。

「皆の中で我らを待つ者たちは？あなたは彼らへ永遠にその皆で眠れども言うつもりなのか！」

少女から厳しく詰られて、ガウエインは一時恐れに負けた自分を恥じた。

アーサー王の円卓の騎士は常に王と万民のために在り、また、常に気高くなくてはならない。

騎士として当然のことを、よほどの剣の使い手とはいえただの少女に教えられたという事実には唇を噛み、それでもガウエインはランズロットへ頭を下げた。

「すまない、俺の間違いだ。行こう。囚われた哀れな魂を解放してやらねばな」

ランズロットは真紅の唇に薄っすらと笑みを乗せ、腕を伸ばしてガウエインの肩を力強く掴む。

「その素直さはあなたの美德だな、ガウエイン」
肩に触れた手は小さいが、力強く温かい。

(姿を見ないとまるで男に励まされている気分になる)
それがまたなんだか惨めさを呼んで、ガウエインはそつと視線を地面に移した。

よもやそのおかしな考えが真実だとは、彼は夢にも思わない。

ただ逆光に浮かぶランズロットのシルエットを見て、もう二度と女だからと侮るまいと心に誓うだけであった。

5・ランスロット、悲しみの砦を攻略する

高名な騎士を含め、多くの人間が犠牲になった砦。

ランスロットとガウエインは今その目前に立っている。

ぎいっと錆び付いた蝶番が音を立て、見るからに重そうな扉がゆっくりと開いた。

そこから滑るように現れたのは噂に聞いた全身に漆黒の鎧を纏った騎士。本来瞳が覗くはずのフェイスプレートの切れ込みからも、見えるものはただ空ろな闇だけであった。

「ランスロット……」

注意を促すガウエインの声を暗黒の騎士と対峙するランスロットが遮る。

「あなたは手を出すな」

ランスロットは腰に佩びたアロンドイトに手を掛けてはいるもののそれを抜こうとはしない。それが何故なのかは後ろで見守っているガウエインにもすぐに分かった。

目の前に立つ異様な騎士は、見る者の恐怖を誘う圧力を全身から発しているものそこに殺気はないのだった。

剣を抜けば負ける。それは分かる。

だからこそランスロットは、敢えて武器を構えずに相手とただ睨み合っている。

やがて「うおおおん」と風の唸りに似た音が周囲に響き渡った。

その音は騎士から発せられ、砦の高い石堀に反響し、四方からガウエインの脳を直接揺らすようだった。

それでも、ランスロットは微動だにしない。

不気味な音が響く中、得体の知れない騎士と向き合う少女。

それはひどく恐ろしく、そして不思議な光景であった。

「そうか……」

どれくらいの時間が経過したのだろう。少なくともガウエインに

はとてつもなく長い時間に感じていた。

ランスロットがぼつりと言葉を漏らした。後ろになす術なく佇むガウエインにはなく目の前の騎士へ向かって。

「おまえもこの砦に囚われているのか」

「うおおおん、うおおおんと鳴り響いていた音がぴたりと止まる。」

「おまえもこの砦に囚われた哀れな魂のひとつとつとつということか。人を引き込めば引き込むほど力は増すが、哀しみも増していたのか」

ついに、ランスロットの右手が剣の柄から離れた。それと同時に騎士へ向かい、一步、足を進める。

「もう嘆くのはよすがよい。このランスロットがおまえたちを解放してやるう。この砦から」

一步一步。ゆっくりと近づくランスロットを、騎士は身じろぎひとつせずに待ち構えている。

「おい……!!」

止せ、と止める間もなく、ランスロットのほっそりとした指先が騎士の胸元に触れる。

途端、騎士は身に着けた鎧ごと塵のように粉々に崩れ、風に吹かれて霧散した。

後にはランスロットと、それを見守るガウエインが残されただけである。

再び扉の開く重い音がして、ようやくランスロットはガウエインを振り返った。

「あなたはここで待っていても構わないが」

どうする？と何事もなかったかのように問うランスロットに、ガウエインは驚きを隠せないまま「俺も行くさ」と答えていた。

「あの化け物は一体なんだったのだ」

周囲に気を配りながら先を歩くランスロットに問う。

門を潜り抜けても、砦の中に人の気配はしなかった。暗く澱んだ空気がねっとり肌を纏わり付けてくるだけである。エクツールに聞いた墓の影も、今はまだ見当たらない。

「あなたも聞いただろう、アレの悲鳴を。アレは悲しみの権化だ。こちらが恐れたり襲い掛かったりしない限りアレも攻撃はしてこない。そういう仕組みで動くものだったのさ」

「悲鳴、というのはあの風の音のようなものか。なぜあれが悲鳴だとわかった？」

ガウエインの耳には風の唸りにしか聞こえなかった。ランスロットの耳には普通の言葉に聞こえたのだろうかと問うてみれば、彼女は肩を揺らして小さく笑った。

「まだ幼い頃にゴーレムを討ったことがあってな。そいつの悲鳴と、アレの声が似ていた。それだけだよ」

ゴーレムを討った。それも幼い頃に。

ガウエインは呆れ返り、そして妙に納得してしまった。なるほど、ただの女ではないはずだ、と。

「じゃあ奴の正体は……」

「ゴーレムのようなものだろう。たぶんランスロットがさりと返す。

「おい、ずっと訊きたかったのだが、あんたは一体何者なんだ」

「何者……と言われても、湖の姫の養い子だとしか答えようがないな」

「養い子？両親はどうした？」

「さて？養母上は森に捨てられていた赤子を拾ったのだと言っていたから、それ以上は知りようがない」

ランスロットは無関心にそう言いきった。

養母から拾われた子だと告げられて、闇雲に己の正体を探した時期もあったがもうそんな歳でもない。自分は湖の姫に育てられたランスロット。それでいいと思っている。

それでもたまに、ふと何かの弾みで「本当は自分はどこの誰なのだろう」と思う瞬間があるのも確かだ。

その時、ランスロットの胸に今朝出会った少年騎士の姿が過ぎった。

見たこともないあの少年は、確かにランスロットという名の男を捜していると言っていた。

果たして彼は何者なのか……。

「おい、これは……」

そんなランスロットの思考を遮るようにすぐ後ろを歩くガウエインが声を上げる。

その切羽詰った調子に顔を上げると、目の前には話に聞いたとおり、いや、それ以上に凄惨な光景が広がっていた。

皆の中庭と思しき場所。そこは何十、何百の墓で埋め尽くされている。

奥のほうの墓石はすでに雑草に覆われており、すぐ手前のものは最近設置されたものらしく掘り起こされたばかりの土が周囲に散らばっていた。

その無数の墓石の上に、墓の住人であろう者たちのしゃれこうべが無造作に置かれている。

あまりの異様さにガウエインだけでなくランスロットも息を飲んでその場に立ち尽くした。

「これがあの化け物に敗れた者の成れの果てか……」

「哀れな……」

呟いて、ランスロットはひとつの墓石に近寄った。

鍛冶職人マーチンの息子ルーシャス　ここに眠る

墓石にはただそうとだけ刻まれていた。

どれだけの月日をここで風雨に曝されていたのだろうか。しゃれ

こうべは所々泥で汚れている。

ランスロットは絡まる草の中からそっと頭蓋骨を持ち上げた。

優しく胸に抱き、服の袖で汚れを落としてやる。

「もう嘆くことはない、ルーシャス。おまえたちの無念は聞き届けた。あとは安らかに眠るが良い」

頭蓋骨に向けて赤子をあやすように囁きかけ、

「ガウエイン」

と突然、呆然と見守る男の名を呼んだ。

「な、なんだ」

「すまないが、墓石を持ち上げてくれないか。首と胸が別々ではゆつくりと休むこともできないだろうから」

我に返ったガウエインは「そうか」とランスロットの言うままに墓石を持ち上げる。現れた穴の中には無惨な骨がばらばらに転がっていた。

ランスロットはその穴に、ゆつくりと頭部を納めた。

「さあ、眠れ」

そう言っただけの無念を慰め終わると、今度は隣りの墓に移り同じように汚れたしゃれこうべを抱き上げるのだった。

すべての亡骸を正しく墓に納めるのに、丸一日以上を費やした。

最後の墓を終える頃には、美しかったランスロットの顔は泥だらけになり、墓石を持ち上げ続けたガウエインの腕は悲鳴を上げていた。

ぐったりと疲弊しながらも、しかし周囲の空気はここに入ってきた時よりも清々しく軽やかに変じている。

「これは……呪いが解けたのか？」

荒い息を吐きながらその場へ入り込んだガウエインを見てランスロットが微笑む。

「いいや、まださ。あなたはそこで休んでいるがいい」

そうしてひとり、庭の隅に向かって歩き出した。

庭の隅に転がる黄ばんだ石。ガウエインがそう思っていたものを、先ほどまでと同じように抱き上げる。

「おまえがこの砦のあるじだな」

黄ばんだ石と思ったものは、髑髏であった。一番汚く古いそれを、ランスロットはやはりきれいに清めていく。

「砦を守れなかった無念は分かるが、おまえの領民はもういない。悲しみに巻き込むのは止めて、もう眠っても良いだろう」

頭蓋骨を傍らに置いたランスロットは、転がっていた角の鋭い石

で地面に穴を掘り始める。穴が十分な深さに達するとそこに黄ばんだ髑髏を置いて、上に優しく土をかけてやった。

「さあ、これで終わっただろう」

盛った土の上に手頃な石を突き立て、粗末ながらも墓に仕立てたランスロットがガウエインの方へ振り返る。

泥に汚れながらもその笑顔の美しさは、いつそ神々しいほどであった。

「本当に……あなた、いつたい……何者なんだ……」

ぐるぐると胸に渦巻く疑問を再び口にしながら、ガウエインは襲い来る睡魔に負けて眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9568t/>

ろまんす！！

2011年9月25日03時13分発行